

弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org

立春は過ぎましたが、まだまだ寒い日が続きます。くれぐれもご留意ください。

二〇二二年から「尾張名古屋・歴史街道を行く」杜寺城郭・幕末史―をお送していますが、今年も「名古屋城下町を起点に広がる臨街道についてお伝えしています。今月は津島街道です。」

★津島街道(上街道)

佐屋街道の北に位置するのが津島街道です。名古屋城下と津島の間をほぼ西に一直線に結ぶ四里弱の行程です。一六二六年に東海道の臨街道として開設されました。

もともとは鎌倉街道の萱津宿から津島に行く道として発達し、津島神社や甚目寺観音への参詣道としても賑わいました。佐屋街道が下街道と呼ばれたのに対し、津島街道は上街道と言われました。

美濃街道の新川橋西詰で分岐し、法界門橋、甚目寺、木田、勝幡を経て、



津島神社に至ります。津島の終着は神社の東側にある橋詰三叉路(はしづめさんざろ)です。

★津島神社

津島神社が天王川と佐屋川に挟まれた中州にあったため、三叉路と津島神社の間の天王川に天王橋という大きな橋が架かっていました。津島街道の南には佐屋街道が通っています。佐屋街道の神守宿から津島神社に行く道も津島街道と呼ばれました。

津島神社は鎌倉街道、美濃街道の萱津宿の西三里、佐屋街道の神守宿からは北西一里ほどの位置にあります。

津島から南西へ一里弱のところに佐屋があります。津島は湊としては佐屋より古く、平安末期には天王川と佐屋川を経て桑名に行く船の渡し

が営まれていました。

「伊勢参り、津島参りにゃ片参り」と詠われた津島神社。その津島神社の数多い祭礼の中で最も盛大で有名なのが天王祭です。大阪天神祭、厳島管弦祭とともに日本三大川祭りとも言われ、五百年以上の歴史があります。壮大華麗なまきわら船やだんじり船を、若き日の織田信長も見物

したと伝わります。

津島神社は建速須佐之男命を主祭神とし、大国主命を相殿に祀ります。創建は欽明天皇の頃に遡り、古くは津島牛頭天王社と呼ばれていました。八一〇年に現在地に遷座し、嵯峨天皇より正一位の神階と日本総社の称号を贈られ、正暦年間(九九〇〜九四年)には一条天皇より天王社の号を贈られました。

「東の津島、西の八坂(祇園社)」

とも称され、京都八坂神社と並ぶ牛頭天王信仰の中心であり、津島の天王さんと言われて親しまれました。津島信仰という表現もあります。最盛期には約三千の末社を擁し、全国津々浦々から参詣者が訪れました。朱塗の鳥居をくぐり、太鼓型の石橋を過ぎると、檜皮葺、入母屋造の大きな楼門(東門)があります。楼門は一五九一年に建立されました。

神社の東側を天王川が流れ、この楼門が正門の役割を担い、門前町も東側に広がっていました。楼門の西には、檜皮葺、切妻造の拝殿、その奥には祭文殿と釣殿、さらに本殿があります。檜皮葺、三間社流造の本殿は棟札から一六〇五年造営であることがわかります。徳川家康の四男清洲城主松平忠吉の妻が、病弱な夫の健康を祈願して寄進しました。

これらの建物はほぼ左右対象に配置され、回廊で結ばれた尾張造と言われるこの地方独特の伽藍配置形式です。江戸時代の尾張名所図会にも現在とほぼ同じ伽藍が描かれています。

★勝幡城と蓮華寺

津島の東、日光川と三宅川の合流地点は勝幡です。両川に挟まれた中州に津島を拠点とした織田弾正忠家が築いた勝幡城がありました。

勝幡城に陣取り、経済拠点である津島湊を支配した織田氏は、津島神社を崇敬し、社殿の造営などに尽力しました。織田氏の家紋である木瓜紋は津島神社の神紋と同じです。後に豊臣秀吉も津島神社に社領を寄進し、社殿を修造するなど、津島神社を厚遇しました。江戸時代には尾張藩主が一三三石の神領を認め、幕府公認の朱印地となりました。

蓮華寺は勝幡城の東一里ほどの場所にあります。弘仁年間(八一〇〜二四年)に空海が開山したと伝わる古刹です。寺の立つ場所は蜂須賀郷であり、蜂須賀小六はこの地の出身です。小六は秀吉に仕えて身を興し、子孫は阿波国徳島藩主となりました。

小六の菩提寺であった蓮華寺は蜂須賀家の帰依を受け、尾張徳川家からも寺領を寄進されました。蜂須賀小六、家政親子の位牌が安置され、仁王門は家政の寄進です。寺の南西には、小六の旧宅や蜂須賀城があったと伝わります。

★津島街道(上街道)と津島神社

来月は津島街道の北側・北東側に位置する美濃街道・岐阜街道・岩倉街道についてお伝えします。乞ご期待。



耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org



皆さん、こんにちは。立春も過ぎ、春が待ち遠しい季節になりました。でもまだまだ寒い日が続きます。くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語をご紹介します。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということなのです。

寒い季節は暖かいうどんや蕎麦が食べたくなります。さて、食べる前に入れるのは一味ですか、七味ですか。この「一味」も実は仏教用語です。

雨は地上の全てのものに平等に降り注ぎます。大小様々な草木を潤し、それぞれの性質に応じて成育させます。お釈迦様は全ての人々に同じ教えを説きました。人が個性や能力が違いますから、受け止め方はそれぞれ。お釈迦様の教えがひとつであることは「一味の法」「一味の雨」と表現されます。

お経の中に「味の異なる川の水も、海に入れば一味となる」という喩えがあります。個性や能力が違って受け止め方はそれぞれでも、お釈迦様の教えの真髄を覚れば同じところに行き

つくことを示している表現です。

親鸞聖人の「高僧和讃」には「衆悪(しゅあく)の万川(ばんせん)帰しぬれば、功德(くどく)の潮(うしお)に一味なり」と記されています。無数の川の水が海に流れ出れば同じ一つの海の水になるように、善人でも悪人でも老若男女だれでも、

仏教を真剣に聞けば全ての人が完全に平等で自由になれる唯一の世界に到達できますよ」という意味です。やはり親鸞聖人の「正信偈」にも「如衆水入海一味」という表現が登場します。

平安時代末期に編まれた歌集「梁塵秘抄(りょうじんひしょう)」は後白河法皇が編者と伝わります。その中に「釈迦の御法(みのり)は唯一つ、一味の雨にぞ似たりける、三草二木は品々に、花咲き実なるぞ、あはれなる」と記されています。三草二木(様々な草木)はそれぞれに差はあっても、みな雨に潤されて育ち、役に立つことを意味しています。

転じて、仏教は貴賤貧富や男女の差なく平等無差別の「一味」であることを伝えていきます。お釈迦様は人それぞれの個性や能力に応じて「一味」の教えを工夫して説いたと言われている

ます。それが「対機説法」「応病予薬」です。しかし、その教えの内容は「一味」です。

そこから「一味同心(心を一つにして味方にする)」「一味徒党(同志の仲間)」という表現も生まれました。同じ目的を抱いて結束すること、同じ目的で集まる心の通い合う同志や仲間の薄い言葉ですね。

日常会話に浸透した仏教用語は往々にして本来の意味とは逆の使われ方をしています。「一味」も本来は「人間は皆同じ」という意味ですが、犯罪グループの「一味」等々の逆向きの言葉としても使われています。

「七味」はお経には登場しませんが「うらみ・つらみ・ねたみ・そねみ・いやみ・ひがみ・やつかみ」という人を苦しめる七つの性質に喩えられることがあります。お釈迦様は「七味」に囚われることを戒めています。

お釈迦様の「一味」の教えを体得すれば「七味」に囚われることもありません。ではまた来月。

※



お知らせ

今年、令和7年1月から、「手配り」は縮小しました。

「山門」にかかわら版を入れた台を置きますので、ご自由にお取りください。

ご協力、よろしくお願いいたします。

かわら版編集部：
大塚耕平事務所 TEL 052 757 1955

